

# 大日本史敍・進大日本史表

宮田正彦

おはようございます。今日は第二回ということで、『大日本史敍』と『進大日本史の表』、この二つの文章を読みながら考えてみたいと思います。お手元にお渡ししました資料は四枚になるかと思えます。最後の四枚目に特に難しそうな言葉について簡単な解釈を書いておきました。

プリントの一枚目、『大日本史敍』ですが、はじめに漢文の本文がありまして次に読み下しがあります。『進大日本史表』も同じ形になっています。これは三枚目にありますように『水戸学精髓』という關山延さんが編さんされ菊池謙二郎先生が校閲されたものですが、これをそのままワープロに移したものです。読み下しについては多少これでいいのかなと思うところもありますけれども、先輩のなされた仕事ですから一応これで読んでいきたいと思えます。漢文はお慣れになっていない方が多いと思いますので、読み下しの方ですつとご覧いただければと思います。まず読んで概略の意味を解釈します。

## 大日本史敍

「先人十八歳、伯夷傳を読み、蹶然其の高義を慕ふあり、卷を撫して歎じて曰く、載籍あらずんば、虞夏の文得て見るべからず、史筆に由らずんば、何を以て後の人をして觀感するところあらしめんやと、是に於て慨焉として修史の志を立つ。上は實録に根據し、下は私史を採摭し、旁ら名山の逸典を搜り、博く百家の秘記を索め、綴輯數十年、勒して一書を成す。」

（これに続いて「名づけて大日本史という」という文字が当初は入っていたのですが、その後この場所を動かしまして文章の終わりの方に移しました。それは藤田幽谷の意見によるものであります。そのことについては後でまた触れると思えます。）

「蓋し 人皇基を肇めしより二千餘年、神裔相承け、列聖統を續ぎ、姦賊未だ嘗て覬窺の心を生ぜず、神器の在る所、日月と並び照らす、猗歟盛んなる哉。」

以上が、第一段であります。先人というのは、綱條にとりまして、義理ではあるけれどお父さんでありますから義公のことを指します。十八歳のときに、史記の伯夷傳を読んで、そうしてそのすばらしい生き様というものに非常な感動を受けました。書物を覆って嘆声を発して、載籍というのは書物です。虞夏というのはシナ

の古い伝説的な王朝です。つまり史記のような書物があつてはじめて、古い昔のことも分かるんだと、同時にまた歴史の書物に依らなければどうして後世の人を感動させることができるであろうか。つまり歴史というものは遠い自分の生まれる遙か遙か以前の時代の出来事を明らかに伝えるものであり、人というのはその歴史上のさまざまな出来事を知ることによって、あるいはその古い時代に活躍したすぐれた人々の足跡を見ることによって、或いはこれを批判し或いはこれに感動して、自分もそのように生きようと思つたりする、歴史というものの持つ働きはここにあると、こう感じたというんです。曰くとありますから「載籍あらずんば」から「あらしめんや」は義公さん自身のことばとして述べられているわけです。傍線を引いたところが義公さんのことばとして文章の中に述べられているところで、もちろん義公自身がこのままの言葉で言つたわけではありません。そういうふうな事を考えられたということです。

史記の伯夷傳を読んで、歴史の書物というもののすばらしい働きに感動して、我が国の歴史を編纂しよう、つまり『大日本史』と後に名づけられる我が国の歴史書を編纂しようという志を立てたのであります。

『日本書紀』以下朝廷において編纂された六国史というものがございませけれども、これは正式な実録であります。しかしそれは途中で編纂が中止されてそれ以後はありません。その後『大鏡』とか『水鏡』とかという書物ができたり、『東鏡』というような鎌倉幕府の編纂した歴史書ができたり、いろいろあるわけですが、平安時代までは、だいたい六国史により、その後はそのような後世編纂された歴史書を読み、さらに

「旁ら名山の逸典を搜り」

古いお寺などに伝わっている典籍・古文書というものを求め、さらにお公家さんの家や朝廷に伝わっている古い記録なども集めて、そうして数十年をかけて、ようやく一つの書物を作り上げました。

義公さんの時代に本紀と列伝、これはほぼ完成しています。これを幕府に献上するにあつてこの「大日本史敍」が作られたわけです。

よくよく考えてみますと、神武天皇がこの国の基を定め給ひてから二千年を越える。その間、天照大神のご子孫である天皇が代々その位を受け継がれ、未だかつてこの日本の国は皇統が他の姓によって奪われるということは無かった。

「姦賊未だ嘗て覬窺の心を生ぜず」

覬窺きゅうというの、隙をうかがつて盗むということです。

途中、弓削の道鏡みたいな者も出ましたし足利義満みたいな者も出ましたけれ

ど、しかし、皇統はそのまま神武天皇のご子孫にずっと受け継がれてきているわけです。

「神器の在る所、日月と並び照らす、猗歟盛んなる哉。」  
これは日本の国の国柄である。実はこの、「蓋自人皇肇基二千餘年…から…猗歟盛哉」まで抜き出しにしてわずか二行足らずの文章ですけれども、ここに実は大井松隣の大日本史に対する見方がはつきり出ております。

ちよつと話は解釈から脱線しますが、大井松隣という人は、彰考館の史臣の中では著述も伝わらず、編纂事業の歴史の中でも特に際だつて有名な人ではありません。藤田幽谷の伝えるところに抛りますと、書物を読んで机にかじりついて勉強するというタイプではなかったようです。むしろ撃剣を好んだ。そういうタイプの人であったと。いわゆる学者タイプとは、異なつた肌合いの人であった。周りの人がそんなに書物を読まなくてどうするんだと言つたらば、孔子や孟子で戦争ができるかと言つた。というような人でありませんが、偶々、幕府に『大日本史』を献上すると云うことになって、序文を彰考館で作れという命令が下りました。彰考館というところは、前にもお話ししたことがあつたと思いますが、藩主が表向きに出す文章とか、あるいは藩主や藩主の親族が亡くなられたときの墓碑銘文とか、いろんなそういう公の文章というのは史館の人々が作文をするんです。

この『大日本史叙』も源綱條の名前になっていきますけれども、文章を作るのは史館の研究者達なんです。どういう事情か、たまたま大井に下書きを作らせるということになりました。大井松隣。号が松隣です。この人は京都ですか西の方の出身でありまして、古学の系統で、いわゆる朱子学の系統ではなかったんですが、人物が優れて学力があるということ、彰考館に採用された人であります。そこで大井松隣は非常に感激しまして、長い序文を最初に作つたんですね。さて、選ばれた大井松隣は当時水戸の彰考館に勤務しておりましたので、水戸の人たちにも見せ、また江戸に送つて江戸の総裁達の批評も乞うた。ところが、これがあまり評判が良くなかった。なぜ評判が良くなかつたかという、当時、松隣は水戸史館に勤めておりました。水戸史館の担当は上代から平安時代の終わりまでの部分の校訂なんです。ですからそこを何遍も読んだ。その結果神武天皇以来歴代の陛下のご仁徳というのが、この国を支えこの国の特色となつて居ると、この国の光はそこから生まれてくるんだということを彼はしみじみと感じたという。そして、それを理解させることが大日本史の特色であると考えまして、それを何とか書きたいということで、ご歴代天皇の全部ではありませんが、七代ぐらいですか重要なところを採つて書いてその時代のことについて触れた文章を書いたんですね。ところがそれは、綱條公が

ご歴代を批評するような意味合いを持つと見られるおそれがある、これはよろしくない。というような批判もありまして、その原稿を一旦捨てまして、そして再び筆を執って書き直したのがこの文章なんです。今残るこの『大日本史敍』なんです。

この「先人十八歳、伯夷傳を讀み…」という「伯夷傳」と『大日本史』の關係を公に表明したのはこの『大日本史敍』が初めてなんです。これは、大井松隣はこう書いて良いかどうかということを、史館の先輩達に尋ねまして、先輩達が「良い」ということになって初めて文章化したという、いわく付きの一文でもありませんけれども。

ご承知のように十八才の時に史記の伯夷傳を讀んで修史の志をたてたと云うことは、現在では義公自身の手紙、遣迎院應空宛の手紙の中にはつきり書いておりますので、間違いない事実でありますけれども、この承徳五年といえますと義公さんが亡くなってから十四年です。一七一四年になりますから。このことはいわば口伝えに史館では事実とされていたけれども、まだ大井松隣も確信を持てるまでには行つてなかつたんですね。そういった先輩達の意見を受けながらできあがった文章です。しかしこの文章、できたときには、史館の先輩達も「すばらしい文章である」ということで、非常にびつくりしまして、綱條にこの文章を差し出してそして許可をもらうときに、わざわざ「この文章は大井の文章であります」ということを申し添えたということが伝えられておりますから、この文章は非常にこの当時の史館員をも驚嘆させた文章であつたんですね。事実、彰考館ではいろいろな文章を作っておりますけれども、その沢山の文章の中でももっとも有名な名文として名高いのはこの『大日本史敍』であります。大井松隣は、その他の業績は殆ど知られておりませんが、この『大日本史敍』の作者ということで名前が今日まで残つた。そういう謂われのあるものなのです。話がちょっと脱線してしまいましたけれども本文に戻ります。

日本の国はそういうわけで代々の天子様が一筋の血脈によつてずーっと続いてきたという、世界史にも見ることでできない素晴らしい国柄であるが、なぜそうなつてきたか。

「其の原もつく所を究むるに」というのはその理由ですね。

「寔に祖宗の仁澤民心を固結して、邦基を磐石にせるに由るなり」

実はこういつた日本の美しい国柄というものの特色は、このご歴代の陛下が仁澤、慈しみの心を持って民に臨まれた。それを国民が仰いで、皆、心を一にしてきた。

その為に国の基本というものが揺るがなかつたんだ。ご歴代の仁徳。祖宗というの

は意味はいくつかありますけれども、以前の、代々の君主という意味で良いと思います。邦基というのは国の基（もと）です。基礎。基本。まあ、此処に居られる方々は、これを読んで、「その通りだ」と素直に納得されると思うんですけども、こここのところの認識というもの。「人皇基を肇めしより二千餘年…」から「其の原つく所…祖宗の仁澤」にありということ、この認識は当時必ずしも一般的ではなかった。そのことは後で申します。

「其の明良際會し都兪吁咈の美、諸を舊記に考へ以て概見すべし。」  
明良というのは名君良臣ですね。君主が優れた臣下たちと巡り会って、都兪吁咈とゆというのくふつは語釈の最初に書いてあります。「ああ」という感歎の文字だそうです。四字で「ああ」と読んで良いんだそうですが、意味は、「都兪」というのは賛成の感動の意味であって、「吁咈」は不賛成の感動の声だと。賛成・反対という意味を含んだ感動。そこから君臣が討論審議するという意味に用いられている。熱心に議論を戦わせる。その美しい姿。立派な姿。というものを「諸（これ）を舊記に考へ以て概見すべし」。『日本書紀』以下六国史を見ればその様子はおおむね分かる。

「中葉に迨ちよびび」  
鎌倉以降になると、そういった記録がないんですね。

「英主迭たがひに興り盈あふを持し成なりを守り」  
更迭たがひの迭たがひですから「たがいに」ということ。盈あふいは満月の「満ちる」という意味です。成はできあがったもの。成果と行って良いと思います。ですから、優れたご歴代の方々が次々に立たれて、その古来から築きあげられてきた素晴らしいものを守り、例えば和歌の世界などは一番典型的で具体的に判りよいですね。後鳥羽上皇出られ、誰出られということ、朝廷における和歌の伝統というものはずーっと現代まで続いてきて、今もまた「歌会始」というのがあります。そういう優れたものを守ってこられる。形で守られる。中身で守られる。

「嘉謀徽猷かほきゆう古に愧かたじけなくづるなし。」  
嘉謀徽猷かほきゆうも同じような意味で、素晴らしいはかりごと。はかりごとという計画になりますけれど、行動ですね、ご事績となりましょうか。それはいにしえに恥ずるものではなかったのです。中世にはいつても、所謂朝廷の正式な記録である六国史がなくなつたあとにも、素晴らしい天皇が出られ、そして君臣力を合わせて、日本の伝統文化というものを守ってこられた。これは古代と変わらない姿があった。

「而るに文獻備らず、明辟賢輔の迹、埋晦章かならざるもの多し」

そういつた優れた臣下や、君臣のご事績というものが、「埋いん」はうづもれる、「晦」は暗い。だから、はつきりしなくなってしまった。

「豈重ねて惜むべからずや。」

惜むべけんやでもいいんでしょね。このままでは残念なことである。

「此れ斯この書の作る所以なり。」

つまり、『大日本史』編纂の理由をここで述べているわけです。平安時代の中頃までは、六国史という記録があるので、それに拠ればいいが、それ以後は無い。無いことよって優れた事実というものが隠れてしまっている。それを明らかにしよう。ということですよ。

「綱條膝下に在りて毎に其の言を聞くに曰はく」

ここからは、義公さんがどういう態度でこの歴史書を編纂してきたか。今までの所は、日本の国というものが素晴らしい君臣のありようの中でずーっと一貫して続いてきた。そしてその記録が中世以降途絶えてしまったのは残念であるから、『大日本史』を作るんだということであつたわけですけれども、その『大日本史』を作るに当たってどういう精神で作るか、いわば『大日本史』編纂の趣旨ですね。傍線を引いたところがそれになるわけです。

「史は事を記する所以なり。」

歴史というのは、事実事績を記すものである。

「事に拠りて直書すれば勸懲自ら見はる。」

歴史書というものは、倫理の教科書でもなければ、批判の書でもない。正確な事実を事実として書き記すということをつとめなければならぬ。そして、ものごとというものは、正確にきちんとそのことが書かれていれば、必ず読む人にとってそれが善悪の判断の基になってくる。自ずからそれは現れてくる。勸懲は勸善懲悪のことです。これはいい。これはだめだ。それは、事実を書けば必ずそこから見えってくるんだ。だから批評の書ではないんだ。客観的な事実を記す。

「上世より今にいたるまで、風俗の醇澆じゅんぎょう、政理の隆替せいり、炤炤しょうしょう然じょうぜんとして諸これを掌つかに観みるが如くし、」

つまり、古い時代から現在に至るまで、「風俗の醇澆じゅんぎょう」、「政理の隆替せいり」、醇じゅんというのとはゆたかな、澆ぎょうというのは衰えるといひましようか。「政理の隆替せいり」、隆替もさかんとそれからおとろえるということですね。ですから政治や風俗の状態などの栄えたり衰えたり、美しかったり醜みにくかったり、そういうものは、「炤炤然しょうしょうぜんとして諸を掌に観るが如くし」それを明らかにすぐ目の前で、手のひらに載せて見られるようにせいと。そうすれば

「善は以て法と爲すべく、悪は以て戒と爲すべし」

この時代はこうであった。ということをはつきりと書けば、そういうことが判ってくるんだ。

「而して亂賊の徒をして懼おそるる所を知らしめ」

この「懼るる」という字は、恐怖で尻込みする、というような意味です。そうすることによって、不良を働こうとする連中に尻込みをさせる。やらないようにさせる。

「將に以て世教に裨益ひえきし、綱常を維持せんとす。」

綱常とは、倫理道德の意。あくまでも事実を詳しく正確にきちんと書き示すという態度を一貫すれば、これは、亂賊の徒を懼れさせ、そして世の人に道を教える、ということになるのだ。そのためには、

「文は直ならざるべからず、事は核ならざるべからず」

文章は真つ直ぐにありのままに書け、飾ってはいけない。事實は核心となるところを正確に伝える。

「如もし出入左右する所あらば則はち豈に之を信史と謂ふべけんや。」

これは都合が悪い、削ってしまえとかですね。あるいはここのところは面白いからもっとうまくほめてやれとか、そういう風なのを舞文曲筆といいます。文を飾ってしまったり、事実を曲げてしまっってはいけないんだ。これは信用できる歴史ではない、本当の歴史ということとはできない。

「是の書の如きは、則はち惟ただ其實を務めて其華を求めず」

文章はへたくそでよろしい。

「寧むしろ繁に失するも簡に過ぐるなし」

少しくどくどしいぐらい書いても良い。というのは、事實が正確に伝わるようにするには、文章を簡略にしようよりは、少し長ったらしくても読んだ人がそのままストレートに判るような文章にしなければいけない。文章を切りつけてしまっで、どっちつかずの解釈ができるというような文章はよろしくない。

「其の刪裁に至りては姑しばらく大手筆に俟まつ有らんと。」

これは文章としてあまり良い文章ではない。編纂の方法ももっとこういう風にやれば上等にきれいにできるといふようなことがあるかもしれないが、それは後にそういう優れた才能の人が出てきたらばやってもらえば良いんであって、我々はまず事實を調べ、事実をありのままに書き記すということを第一にやれ。考えよ。ということが義公さんの言葉であった。

「事に拠りて直書すれば勸懲自ら見はる。」

というのは『大日本史』の基本精神としてよく言われております。此処の線の所の文章はもちろん義公さん自身がいわれた文章ではないわけで、では何をもってその文章を書いたかといいますと、安積澹泊に『検閲議』というのがあります。これはですね、義公さんが亡くなった後、幕府に上程するに当たって文章を全部見直しまして、もう一回資料に当たり直して正確を期した。そのときに文章がブキブキしているところを直してしまうとか、そういう風なことが行われそうになったんですね。そのときに安積澹泊が「義公さんはそれはならんといわれたぞ」と。

「其實を務めて其華を求めず、寧ろ繁に失するも簡に過ぐるなし」

この言葉は『検閲議』の中に出てくる言葉なんです。この言葉は安積澹泊を通して、義公の言葉として伝えられたものです。それから、義公さんの生きていた時代に、この「事に拠りて直書する」そして「世教に裨益し、綱常を維持せんとす」という精神は義公さんの生きていた時代に作られた『開彰考館記』という文章があります。短いものですが、これもまたこういう機会にじっくりと読んでみるのが良い文章ですけれども、そういったものにこの部分は依拠している。大井松隣は大議論をして、ご歴代のご実績をずーっとつづつて、日本歴史の骨髄というのはこうだということとその序文に書こうとして、批判を受けてそれを捨てた。その結果、自分の意見・議論というものを一切述べずして、義公の言葉として伝えられるものをここにもつてくることによって、本書の精神を明らかにしようとしたんです。

「書未だ成るに及ばずして先人世に即く。」

即世というのは亡くなるということですね。死ぬということですよ。まあ、未完成のうち義公さんは亡くなりました。

「綱條無似ぶじと雖も」

無似というのは、不肖の息子であるが、ですね。

「遺囑を服膺して敢て失墜するなく、十餘年を閲みして校訂略ほぼ完し。」

父親の遺志を継ぎまして「遺囑を服膺して」、そうして、努力をしまして十餘年かかって、一通りの校訂を終わりました。その内容は、

「神武より 後小松に至る歴世一百、」

神武天皇より後小松天皇に至るまで百代、これを

「立てて本紀七十三と爲す。」

立てて本紀七十三巻に纏めました。そしてその間の活躍した人々の伝記、

「列傳は一百七十」

列傳は一百七十巻。



「都すべて二百四十三巻。」

合計二百四十三巻にいたしました。

「名づけて大日本史と曰ふ。」

そうして『大日本史』という名前を付けました。もちろん

「敢て 昭代の成典と謂ふにあらず。」

この平和な素晴らしい、よく治まったこの時代を代表するような書物というのではありません。これは謙遜しているわけです。

「乃ち後來修史者の採擇に備ふるのみ。」

私もは、一通り仕事をしましたので、あとは優れた歴史家が後世に出てくれば、これをどのように料理してくださろうと結構なのであります。ただ

「若し夫れ時運の開塞行事の得失、以て勸と爲すべく以て戒となすべきものは、悉く事に據りて直書し、敢て出入左右する所あらず。」

重ねて申しますけれども、この歴史上のできごとというものの中で、我々がお手本とすべきもの、あるいは戒めとすべきもの、そういったものはことごとくこれを取り上げて、事実に拠って書いて、毀誉褒貶は加えておりません。

「亦先人の意を遵奉<sup>じゅうほう</sup>する所以なり。」

これは先人の意を遵奉する所以であります。あくまでも義公の遺志を尊重したからであります。

全体の意味はそういうことであろうと思います。

### 進大日本史表

次、『進大日本史表』のほうにいきます。

この文章は、藤田幽谷であります。幽谷先生は東湖先生のお父さんですね、この人が原文を作りました。そうしてまた史館の面々と討論をして、文章を修正しながら作り上げたものです。これは文化七年、朝廷に献上することになったときに作られた文章ですから、「大日本史をタテマツルの表」「大日本史を進めるの表」

「進」という字はタテマツルとも読みます。従って綱條つなえだではなくて治紀はるとし、文公さんです。

「臣治紀言す。伏して惟るに、太陽の照らすところ率土日域にあらざるなし。」

この日本の国、太陽の照らす所は日本の国土であるという意味です。

「皇化の被るところ環海咸天朝を仰ぐ。」

陛下の徳化が及ぶところは皆皇室を仰いで来たのであります。

「帝王授受三器、神聖の謨訓に徴し、實祚の隆なること天壤と窮りなし。」

こういふ言い方をしているとよく分かりませんが、「帝王は三器を授受する」と読んでも良いような気がします。鏡と剣と玉とこの三種の神器が天皇の御位の象徴としてずっと受け継がれてきております。その天皇の御位というのは天地とともに窮まりない、永遠のものである。ということは、天照大神のお言葉というもので明らかであります。これはこの前の告志篇の時にも有ったと思います。「寶祚之隆當與天壤無窮者矣あまつひつぎのさかへまさむことまさにあめつちときはまりなかるべし」という天壤無窮の神勅というのがありますが、これを指していることと思います。

「國家治亂一統、姦宄かんきの窺竅きゆうを絶ち、」  
外にあるを姦と言ひ、内にあるを宄と言ふ。といふんですがどっちも天皇の位を狙う悪いヤツです。

「威靈の遠き、華夷に光りあり。」  
外国にまでその光が及んでいるということ。華夷の「華」は中華、日本のことであり、「夷」は外国のことです。

「然りと雖も、時運の盛衰蓋し諸これを朝暮に譬ふ。」  
ずーっと歴史を見てきますと、神代から現在に至るまで天祖の神勅はあらたかであつて、万世一系の皇室のご恩徳というものがこの国を保ち、誰もその位を窺おうとするものはいない。またその恩徳は海外にまで光り輝くようなものがあるんだ、と。だからといってこのままボケーツと安心していて良いのか。そうではあるまい。「然りと雖も、時運の盛衰蓋し諸これを朝暮に譬ふ。」世の中の盛衰というものは、一日でいえば朝盛んであつても暮れには衰えてしまふ、という風に例えられる。昨日株が幾らだったが、今日になったら何十ドル下がったとか変化するわけですね世の中というのは。いつどのような変が起こるか判らない。昨日は関東大震災の記念日でありますけれども、そういうことも起こるでしょう。もっと大変なことが起こるかも知れない。

「是を以て人事の得失、宜しく古今に鑒み、」  
そういうわけで油断をせずに、大変動というようなものを起こさないようにするためには、「人事の得失、宜しく古今に鑒み、往を彰かにし來を考へ」彰考館という言葉の由来ですね。

「述あり作あり、」  
そのための研究を行い、文章を作る。

「善を勧め悪を懲らし、或は褒し或は貶すべし。」  
道義によつて物事を判断し、これは駄目だよ、これは良いんだよ、ということをして世の中に明らかにしていかなければならない。

「屬辭比事」

は難しい言葉ですけれども、いろいろな文章を作り或いは物事を議論する、という意味のようです。

「殊方豈載籍なからん。」

この殊方というのもですね、方法を殊にするという意味もありますし、あるいは外国という意味もあります。どちらの意味にとるのが良いのか。さまざまな方法があり、様々な書物が出来ている、という意味に取っておきたいと思います。いろいろな文章が作られる、物事が議論される。比較対照するにはいろいろな方法があり、いろいろな書物があるでありましょう。しかし、

「詳内略外、正史固より體裁を存す。」

ここの文章の読み方と解釈の仕方がちよつと難しいと思うんですが、自分の国のこととは丁寧に書いて、外国のことは省略する、というのが正史の体裁である、というような意味ではないかと思えます。これは暗に、いわば、『大日本史』というのは、世界史ではないと。我が国の歴史だといっているのかも知れませんが、あるいは、いろんな方法があるが、紀伝体という形を採ったということを暗にいつているのか、私自身どうとつていいのか判りませんが、なぜこういう文章になるかといいますと、大井松隣の文章は、これはいわば日本語を漢文にしたような文章であります。形としては古文に近いんですね。つまり漢代以前の文章に近い。ところが、この『進大日本史表』は四六駢儷体しろくべんれいたいという文体で書かれています。本文の方を見ますと、四字と六字で切れていますね。ですから文章が詰まってしまうんです。シナの音で読みますと一種のリズムがあつて美しい文章になるらしいんですが、日本語で読むときにはこの四六駢儷というのは意味が凝縮されるといふか、難しい。まあ一応、後の方の書き振りからみますと、『大日本史』の特色というものについてかなり書いておりますので「正史固より體裁を存す」というのは、紀伝体という形にしたことを暗に言っていると解釈して良いのかなあと思えます。これは疑いを残しておきます。ここまでもなかなか詰まった文章です、難しい。

「臣治紀誠惶誠恐、頓首頓首、欽つしみて惟おもんみるに」

恐れ奉つて謹んで考えまするに、

「皇帝陛下」

は、このときの天皇です。

「元祖の正統を紹つぎぎ、神明なる其の徳、八方に照臨し、聖人の大寶を守り、寛仁の政、群生を子育し、古を稽かんがへ事を立て、己を恭うして爲すなく、文化の號

を宇内に播きたまふ」

今の天皇陛下が先祖の教えを守られ、素晴らしい徳をもってこの日本国を治めておられる。すべて、歴史を考え自分の我意をたてずに、年号は文化とその名にふさわしい時代になっている。

「何人なにびとか 聖天子の風教に遵したがはざらん、辨學の任を關東に委ゆたねらる。臣等嘗て大將軍の家訓を聞けり。」

そのように文化という号があり、平和な、学問の盛んな時代になってきた。その中で、征夷大將軍である徳川將軍は、学問の方のいわば日本における最大責任者でもあるんです。それは、征夷大將軍の称号の中に「淳和じゆんわ辨學べんがく兩院別當りゅういんべつとう」という言葉が入っているんです。それは語釈のほうに書いておきました

が、辨學院というのは、平安期に在原氏がその子弟のために造った大學別曹べっそうのことで、大學別曹というのは大學で学ぶための寄宿舎兼予備校みたいなものです。これはもう平安時代に無くなってしまっただけでも、勸學院とか辨學院とかいくつかありますが、みんな違います。淳和院というのは、淳和天皇の別荘でありまして、これは大學別曹とは関係が無いんですが、この淳和院も廃れてしまっただけで、この淳和院のいわば別當、公卿別當というんですが、管理者というんでしょうか、辨學院の監督者というのは、源氏の第一人者がなるという慣例が出来ました。徳川氏は清和源氏ということになっています。それで、代々の將軍は淳和辨學兩院の別當になる。そうしますとこれは日本の文教を司るんだ、ということになるわけです。そのことを言っているわけです。

「辨學の任を關東に委ねらる。」

「委ねらるるは」というふうに読んだ方がいいような気がします。

「臣等嘗て大將軍の家訓を聞けり。」

代々將軍家の家訓の中で、淳和辨學兩院別當であるということは、天下の文教に責任を持つんだと、いうことが伝えられていた、ということを知ることがあるということでしょう。こういう文化、学問の盛んな時代にあつて、しかもその学問の世界、文教の世界の総責任者である將軍家の一門に生まれた自分の責任は重大なんだということを知っているんだと思います。しかしながら、

「伏して念ふ、臣材質愚鈍にして、學問空疎なり。」

頭も悪く、勉強も足りない。と

「徒に父祖の餘蔭を承け、叨みだりに藩屏の重寄に膺あたる。」

水戸藩はいわゆる、「以て国家に藩屏たり」と弘道館記にありますけれども、將軍家を支え日本国を支えるという重要な任務をもった御三家の一つであります。

「爵、三位を忝うして尸素<sup>しそ</sup>の譏、免れ難く、」

位は三位を頂いておる。結構高い位であります。それなのにろくな事をしていないから、盗人だと譏られても仕方がないぐらいであり、

「官参議を帯びて牆面の陋、是れ慚づ。」

官は参議である。しかし自分は前に垣根があつて先が見えないように、学問が無く道理に暗い。これも恥ずかしいことである。朝廷から高い位や官を頂いていながら、その任を全うできないことは慚愧に耐えない。ということなんでしょう。

「惟<sup>ただ</sup>此の國史、責臣が家に在り。」

しかしながらこの『大日本史』の編纂ということは、これは我が家水戸家の責任である。

「忠を 本朝に竭<sup>く</sup>さんと欲せば、盍<sup>あ</sup>ぞ孝を前人に追はざる。」

孝行というのは忠の基だというわけです。

「臣五代の祖先光圀少にして學を好み、義を爲すに勇、身は外に在りと雖も乃の心は王室に、」

「身は外に在り」というのは直接朝廷にお仕えしていないということです。その次の「乃の心は王室に」というのは註に付けておきましたが、『書経』に「身在外、乃心罔不在王室」（みハそとニあるモそのころハおうしつニあらざるナシ）という言葉があるんだそうです。これを四六文ですから四字に切り過ぎちゃった、七字ではどうしようもない。ふつう「乃心王室」（おうしつニだいしんス）と、四字の場合には表現します。漢文のほうを見ますとそうなっていますからね。（だいしんス）と返って読むことが多いんだけど、どうもその読み方は感心しないというので、關山さんが（そのころハおうしつニ）というふうに、日本文としては半端に切つてあるわけです。ようするに（そのころハおうしつニそんス）という意味なんですね。乃（そ）のという字は（すなわち）とも読みますから（みハそとニありトモ、すなわちおうしつニこころス）というよみかたも出来ないことはないと思ふんですが、『書経』に出典があるために、こういう風に読んでいるわけです。

「毎<sup>つね</sup>に舊史の闕文を慨き、歴世の實録を修めんと欲し、館を開き士を聘し、名山通邑の逸書を輯録す。」

名山というのは、寺院。有名な古い法隆寺とか東大寺とか東寺とか。あの『東寺百号文書』という膨大な文書がありますけれども、京都の東寺ですね。これを発見したのは、水戸の史臣です。『大日本史』の編纂過程でこれが出てきた。それから九州の有名な『寝禰文書』も佐々宗淳が発見した。白河結城文書もそうです。『大日本史』の編纂過程でそういう埋もれていた記録が発見されています。それは、丹念

に筆写されてみんな彰考館に集められている。

これはちよつと余談になりますが、彰考館には国宝となるような書物は一つしかないんです。確か、一つだと思えます。あれだけの編纂事業をやりながら、所謂古書、古い書物を買ひ込むというようなことはほとんど無かった。そういう書物は本来あるべき所にあるのが本当の姿。いくら金を積んだからって持って来ちゃうのはいけない。で、どうしたかというと、写した。全部写した。全部其処へ使臣を派遣して筆写させた。そしてしかも、それも大事なものは一部だけじゃなくて、持って帰ってきてこつちで二部も三部も作って、さらにそれを朝廷に献上したりしているわけなんです。一カ所にあると火事に遭って焼けてしまう危険もあるわけだから、大事なものは必ず複本を作って別に置く。こういう事をやらせた義公さんという人は大変な人だと思えます。今でこそ、コピーがあり、写真製版があり、いろいろありますから、あちこちに同じものが置けますし、印刷したものなら何千部何万部とあちこちにありますから、残りやすいですけれども、当時においてこれを考えたという事は、偉いことだと思えます。それはともかくとしまして、

「購求の切なる、使幣を遠邇に馳せ、」

使幣というのは、この場合おみやげを持った使いという意味なんでしょうか、遠く近くあちらこちらに馳せ、

「人に因つて傳奏し、」

伝手を頼つては、朝廷にお願いをして、

「蘭臺石室の秘冊を借ることを許さる。」

「蘭臺石室」というのは、シナの方から出てきた言葉であつて、蘭臺は漢の正式の文庫である。石室は史記の太史公序に出てきて有名な非常に嚴重に書物をしまつておく場所。ということ、いずれもまあ尊い辺りの図書館・図書室ということ、す。事実これは『礼儀類典』の編纂の時には、朝廷の儀式書といふべきものあるいは公家達の日記類なども借りて写しています。これは幕府でも林家で、『本朝通鑑』を編纂しますけれども、こういつた京都の古い社寺の記録や、公家達や朝廷の記録というものは、参照できなかった。義公さんだから出来た。義公さんに対する信頼。それがやつぱり朝廷にあつたんです。

「緡閱の勤、寢食を晝夜に忘れ、貫穿馳騁、」

「貫穿」というのはですね、これも意味がありますが、研究が隅々まで行き渡つた。昔から今までの学問を研究し尽くす、というような意味がありますから、隅から隅まで調べれる。「馳騁」は走り回ります。

「衆技を集め以て效を成す。取捨裁斷、獨特の特見を發し、紀・志・表・傳、一

家の言を創立す。」

本紀・志・表・列伝、こういう構成を以て独特の見を發明した。史実の中にあるそれまでの誤りを訂正することが出来た。

「信疑を筆削し、庶はくは萬世の鑑と爲さんと。」

これも「信疑を筆削し、萬世の鑑と爲らんことを庶ふ」とも読めますね。

「神武より起し、明德に至る、」

内容は、神武天皇から後小松天皇の明德。明德というのは元号です。

「敍次一百代上下二千載、幽を闡ひらき顯を微にし、始に原づき終を要とす。」  
これも『左伝』とか易とかに出てくる言葉なんですね。「顯を微にし幽を闡く」ということは、隠れていたものを明らかにする。闡明の闡ですね、かすかにしか見えないものを明らかにして、「顯を微に」というのは変な感じですね、「微を顯に」といいたいところなんです。が、「顯を微にする」という言葉があるんです。それはどういう意味かというところ、明らかなくことを露骨でなくする。という意味なんです。例えば豊臣秀吉とかいう風な人の伝記というのはいろんな尾ひれが付いているでしょう。そういった尾ひれを取って、真実の所、確実なところだけを叙述する。というのが「顯を微にする」の意味なんじゃないかなと思うんですが、いかがでしょうか。ちょっと自信ありません。伝説というのはいろんなものがくつついていますね、だんだん膨らんでくる。聖徳太子の伝記は『日本書紀』に基本的な資料があるわけですけども、そのあと奈良時代を通して段々、いろんなお話が付け加わってくるとともに、そのお話がまた段々変化してくるんですね。例えば、片岡山の飢えた人を哀れんだということが、その人は実は神人であって仙人である。次の時に行ったみたならば、与えた外套だけが残っていて本人の死体は消えていた。というような話になって、じゃあ消えたあの死体は誰かということ、あれは仙人じゃなくて、いやこりや達磨大師だったんだ。と話が段々膨らんでくる。更には、聖徳太子は実はそれをも見抜いていた。それは太子の前世はシナに生まれた慧思禪師だったからだ。と話は更に膨らんでくるんですけども、そのどこまでが事実として認められるか、ということ調べて確定するのも歴史の仕事ですから。そういうことを言っているんだと思います。「始に原づき終を要とす。」というの、いわば原因・結果というものをしっかり押さえるということではないかと思えます。そういう風に研究を進めた結果が、というんでしょ、やはり三大特筆ができた、というんです。その三大特筆を次に書いています。

「大友を帝紀に陞のぼせるは、老翁の日を捧ぐるに徴し」

大友皇子。いまは弘文天皇ということでご歴代に数えられておりますが、『日本書

『紀』は弘文紀というのではないんです。天智紀の次は壬申紀と呼ばれる記事が挟まっています。壬申というのは暦の壬申です。その次は天武天皇紀になる。大友皇子は『日本書紀』では明らかでないが、天皇の位につかれたに違いない。それは、実は年紀の数え方やなんかの資料が一年ずれている記録があるんですね。そういうことを根拠にしてご歴代に数えた。これが明治になって、弘文天皇と諡されてご歴代に加えられたわけです。「老翁の日を捧ぐるに徴し」というのは、これは『懐風藻』の大友皇子の作った詩の序文に、そういった人が日を捧げて自分の所に太陽を持ってきたという言葉があるんです。実はこの『懐風藻』のその序文や中身が『大日本史』の弘文天皇即位の根拠の一つになっています。そのときは使われていませんが、現在ではもう一つ、今残っている薬師寺の東塔、あれの檼さき。五輪の下の四角い檼と呼ばれる部分があるんですが、そこに銘文が入っているんです。下から見たって見えます。そんなことで今日では弘文天皇御在位が認められている訳なんです。学者によつては、正式な即位は、即位の式典は無かつたのではないかという人も居ます。ただ実質的には、天皇の地位にあられたということは承認されているわけです。まあそれはどうでも良いですね。そういう根拠を示した。

「神功を皇紀に列して眞主を遺腹に掲ぐ。」  
神功紀というのが、『日本書紀』には本紀の一つに立てていますが、それはおかしいと。正式の即位の記録は無い。あくまでも皇后としてずっとおられた、ということとで神功皇后を皇紀傳に落として、本紀から除いたわけです。「眞主」というのは応神天皇です。

「西東の争、南北の亂、皇統を正閏するは唯神器の在否に視る。」  
これは、源平の争いと南北朝の戦いですね。この際、順逆が不確かになるわけです。西東の争は源平の争い。神器をかかえて平家が逃げたときに別の天皇が立つでしょう。そこで二人天皇が居ることになる。どっちが正統か、これは神器を持っていた方。という判断です。皆さん南北朝のことはご存じだと思いますが。あくまでも南朝を正統にした。それは神器が南朝に伝えられたから。

「逆順の際忠奸の別、人臣を是非するは悉く公論に由つて折衷す。」  
この意味も難しい。公論というのはなんでしょうか？その部分を担当した人が勝手に判断するのではなくて、史臣でお互いに討論した。ということでしょうか。まさか日本全国の世論を聞いたわけではないですからね。彰考館の史臣の書いた文章の中に、いろんな人物論や事件論があります。そういうのを発表してはお互いに批判し合つたのではないのでしょうか。批評し合つたんだらうと思います。このように、



三大特筆といわれるように今までにない形で編纂をし、しかも大友皇子・神功皇后・南北正閏というような大事な問題について、判断を示したわけです。

「我を知り我を罪する蓋し深く自ら任ず。」

そういう判断を明記した、この一切の責任は自分にあるんだ。ということですよ。

「之を刊し、之を正し將來に待つあり。」

いま出版するが、これは世の批評を待つものである。前の大井松隣にもありましたように、「大手筆を俟つ」という言葉がありましたけれども、その意味でしょう。

「爰に高祖綱條より以て先父治保に至るまで校訂補修、四世の間怠ることなく、潤色討論百年の後稍定まる。」

約百年経っていますね、文化七年ですから。文化七年は西暦一八一〇年。義公さんの亡くなったのが一七〇〇年ですから、百年経っています。

「顧ふに此れ一家の撰、豈三長之れ具はると云はんや。」

三長は其処へ書いておきました、歴史家の備えるべき能力といいましうか、才知と学問と見識。これを三長と言うんだそうです。歴史家というのは大変な能力が必要です。

そういう新しい意見や特色は出したけれども、決してこれが優れていると言っていないということです。

「徒に星霜を閲して功緒を竟るなきは先臣の尤も心を苦しめしところ、愚臣何ぞ敢て力を竭さざらんや。」

とにかく、時間ばかりかかっていて、いつまで経っても終わらないというのはよくないんで、自分も其処に非常な苦心をしてきた。

「曩に幕府の催督に遭ひ、將に史藁をして木に上せしめんとす。」

幕府献上の時のことあります。確か享保年間でしたね。

「竊に顧ふ、斯の書私撰に属すと雖も、苟も世に傳ふる、國體に係るあり、昔初め藁を脱し假りに題號を冒す。今且さに版に鏤せんとす、」

ここところは実は、『大日本史』の書名について言っているわけです。はじめ水戸藩で勝手に『大日本史』と付けた。しかし、「日本史」と付けるからには、やはり朝廷の許しを得なければならぬ、というのが幽谷の意見だった。幽谷が史館員になったあと、この問題を取り上げて立原総裁に進言しているんです。『大日本史』の三大議というのがある。三つの大きな議論ですね。当時幽谷が史館に入った頃、出来上がっている本紀と列伝をもう一回校閲して、正確な物にしなおしてそれを出版して、あともう彰考館を閉じてしまふ。本紀と列伝だけでいい、志と表は要らないということが出てきて、それに猛烈に反対したのが高橋広備、あるいは藤田

幽谷、小宮山楓軒。それから『大日本史』という名前を使って良いかどうかという議論。そういう風なことで、この当時の幽谷らにとってはこの「書名」というのは大事な問題だったんです。そこで朝廷に奏請して、「その名前でよろしい」と許可を頂いたわけです。そのことが其処に書いてあるんです。

「曷ぞ奏請することなからんやと。乃ち百揆の吹嘘に因り竊に九重の進止を取り、恭しく天意の降鑿を蒙り、書名を公行せしむるを許さる。是に於て累葉の志願一朝にして伸ぶることを獲たり。」

累葉というのは歴代です。

「踊躍奉承感激已むなし。速かに劄劄きけつの工に命じて、永く繕寫の勞を省く。」

「劄劄の工に命ずる」というのは、版をおこして出版するということです。木版ですから当時はね。繕寫というのは、清書する、写すことです。朝廷や幕府に献上するということになりますと、大変なんです。紙だっていい加減な紙じゃあいけませんから、どの紙、と行って選んでそれを大量に用意しまして、そして一字一字丁寧に写すわけです。その筆写する人を集めなければならぬ。前に調べたことでは、『礼儀類典』という、朝廷の儀式を集成したものを作って、幕府や朝廷に献上しているんですけども、書写生が六十人でしたかね、ひとり一日二枚が多くて三枚。それしか書けないんです。どうやったか知らないが、きちつと位置を揃え行を揃えやりますから、線を引いてやるのかどうするのか知りませんが、考えてみるとまことに遅いんです。皆その書写場まで出勤して、みんなして並んで写すんですが、能率を上げるために、出勤しないで自分の家でやっても良いと、そのかわりにノルマを三枚にするとか、そういうことをやってみたり、いろいろ苦心して書写の能率を上げようとしています。これはもう大変なことなんです。自分で見るだけだったらそんなことは無いんです、一日二枚なんて事はないんですが「あっ、間違った」とか「ここんとこ墨こぼしちゃった」とかで全部それが駄目になって、また書き直しでしょう。もう、大変なことだったらしいです。しかも字を揃えなきゃいけないんです。大勢で写すから、下手な字うまい字があっちゃいけないんです。書体も揃えなきゃいけないんですね。容易なことではなかったようです。まあ、それはともかくとして、「永く繕寫の勞を省く。」というのは筆写の勞を無くするということですよ。

「先臣修むるところの大日本史、本紀七十三卷、列傳一百七十卷、校訂粗ば完きも、彫刻未だ半ばならず。」

本紀は七十三卷、列傳は百七十卷出来ていて、文章の方はほぼ完成しているんだ

が、版木の方はまだまだ追いつかない、と。印刷はまだ途中であります。さらに、志と表というのもわずかしかできていない。

「其の志・表・若干、録ありて書なきもの、方に且つ補修するも尚ほ未だ全く備らず、」

この志と表のほうはできあがりも不十分。資料は集めてあっても、本になっていない、文章になっていない物もある。今、努力しているけれども完成には至っていない。『大日本史』という題名をいただいて、これを献上するんだけど、実は未完成の書物なのであります、ということですよ。

「臣愚以爲へらく、」  
私考えまするに、

「其の歳月を遷延して功を全うし竣りを告ぐるよりは、」  
これから何年かかるか判らない。全部出来たら差し上げるといふよりは、

「嚴に課程を立て成るに随つて呈上するに如かずと。」  
取り敢えず献上しておいて、そして何時何日までこれを上げよう、というふうに決めて期限を立てて、そして出来上がったら、出来上がった物から順次に差し上げる方がよろしい、というふうに考えました。そこで、

「故に今紀傳二十六卷、刊刻已に就るもの装うて一函と成し聊か先づ上送し、餘は將に續進せんとす。」

ひと箱に今まで出来上がった物だけをまとめてさしあげます。あとは続きで差し上げます。

「謹んで表に随つて以て聞す。上 天覽を塵し奉り、下情慚懼戰汗、」  
戦はおののく。ふるえて汗が出ます。

「屏營の至りに任<sup>た</sup>へるなし。」  
屏營はおそれる。

「臣治紀誠惶誠恐頓首頓首謹みて言す」

誠惶誠恐頓首頓首とか死罪死罪というのは、丁寧な文章の最後に使う言葉です。

この『進大日本史表』はたいへんむずかしい文章でして、概略の意味をお酌み取り頂いたと思うんですが、内容をもう一度考えますと、まず、日本の国柄というものについてはじめに触れて、そして、歴史によつてやはり学ばなければ、不慮の事態に対する備えも出来ない。歴史を教訓とすべきである、と。現在、文運さかん天下太平であつて、すばらしい徳を及ぼして頂いておる。そういう中であつて、徳川の一族として日本の文教に責任を持って、自分としては、学問も足らず道も知らず、まことに恥ずかしいことではあるけれども、何とかお役に立ちたい、というな

かで、この『大日本史』の編纂事業というのは、先祖以来の我が家の責任でありますので、一生懸命努力をしてこれを作ってきました。その結果、やはり三大特筆というものが出来上がってきました。その三大特筆はこれこれである。しかしもちろんこれは、その私説を自分の意見を強制するわけではなくして、後世の批判を仰ぎたいとは思うのだが、出来上がった以上はこれを朝廷に献上する。その書名についても朝廷のお許しをいただいた。そして、全部は完成していかないけれども、その一部から順番に献上致します。解釈すればそういう内容だと思えます。文体は四六駢儷体という文章のスタイルをとり、しかもその文章の中にちりばめられた、いろいろな熟語は広く古典に依拠している文章ですから、なかなか解釈も難しいところがあるわけです。

以上が、『大日本史敍』と『進大日本史表』というものの原文そのままであります。

これを読みますと、いわゆる水戸の歴史学の立場というものの、『大日本史』の精神というものが大体おわかりになったと思います。特に『進大日本史表』では、三大特筆というようなものについても触れています。まあ、いわば『大日本史』というものの性格はこのふたつを見れば言い尽くされていると言つて良いと思います。結局、我が国の歴史というものを、ご歴代の神武天皇以来の一系の皇統の存在と、そのご歴代の陛下のご恩徳というものがこの国の根本なんだと、この国の歴史を、光あらしめているのはそれなんだと、それは「天壤無窮の神勅」というものによって守られているといひましようか、伝えによって守られてきているんだ、という、やはり国体観ですね、これが水戸の歴史というものの根幹である、ということがこれでおわかりになると思うんです。

ところが、はじめにちよつと触れましたように、必ずしもそのことは天下の公論とはなっていないかったです。そういう問題について、深く考えられたのが、もとの東大文学部の国史学科の主任教授であつた平泉澄博士。その博士に『萬物流轉』という書物があります。わざと旧漢字で書きましたけれども旧漢字の本なんです。これは所謂戦前、昭和十一年に出版されたものでありますが、この『萬物流轉』は、この問題を取り扱つたといつて良い書物なんです。先生の著書の中でももっとも重要な書物なんです。どこで講義されたか、これは講義がもとになっているんですが、これは北海道帝国大学での集中講義がもとになっている。当時、北海道帝国大学というのは、今でもそうですが、非常に左翼が強かつたんだそうです。そこへ乗り込んでいって先生がこの講義をされた。それがもとになっているというふうに聞いております。結局人間というものは、時勢の動きに乗って漂っていたり、自己

の利害だけを考えて右に行ったり左に行ったりふわふわしているんでは、その人の人生は意味を為さない。自分自身の確固とした不易の道、変わらない道、立つべき抛り所というのをしっかりしなくちゃいけない。それをどこに求めるべきか、実際にこの人間世界というものは、すべてが変化し流転するわけです。「パンタ・レイ」という言葉がありますが、すべてが変化している。諸業は無常なり。その無常のなかに変わらないものがある。その唯一の抛り所は何か、ということを追求している。前半はやはりその変化の相です。万物は流転す、というその嘆きをずーっと論証されている。で、後半は一転して、然らばその中における我らの抛り所は何かということを論じられた。もしお読みになっていない方は、一度じっくりと読まれると良いと思います。その中に、遊佐木斎ゆさぼくさいと室鳩巢むろまほうそうの論争が載っている。これは大体元禄十年前後ですから、義公さんの晩年の頃ですね。この二人の論争、手紙のやりとりですけれども、戦わした議論を紹介しておられます。その中で、遊佐木斎は「崎門」、山崎闇斎の「崎門」の人です。室鳩巢は当時幕府の文教を司るもつとも有力な人物です。今では比較すべきものはないかも知れませんが、ども、全国国立大学協会の長とか何とかというふうな位置に当たるでしょうね。それが室鳩巢です。その人の意見というのは、將軍も重んじるところであり、政治への影響力も大きい。いわば学会を牛耳る立場にいる人。その人の意見というものの、手紙に対して、遊佐木斎が批判を加えているわけなんです。どういふことかということ、議論の発端は、室鳩巢が「もし王者の起こることがあれば」ということを手紙の中で言ったんですね。つまり、日本の国に堯や禹のような人物が現れて、いわば朝廷に代わるという意味ですね。それについて、「それは絶対に、そんなことは言うべきではないしあるべき事ではないんだ。」と、「我が国は万世一系で来ているんだ。」と遊佐木斎は言った。それに対して室鳩巢はこういふ返答をしているんですね。「もの始めあれば必ず終わりあり、これ天地の常経なり」どんなものだって必ず滅びるときが来るんだ。どんなに徳の高いものであっても二百年三百年四百年と生きることは出来ない。それと同じように国家も王室もすべてが滅亡の時があるんだ、それが自然の理なんだ。我が国では、事実として神武天皇以来百王姓を変えず、万世一系ですが、それはなぜかという、我が国は小ちやい、国が小ちやい、そして人民は皆愚かで無知なんだ。神道のような鬼神を尊ぶ教えがあつて、これが民を教化してきた。その影響で常に、天皇は天照大神のご子孫だということで、頼朝が出てきても秀吉が出てきても、皆いわばそれを敬してずーっと続いてきただけなんだ。それはいわばそういうふうになってきたというだけ、偶然である。ではもし日本にシナ大陸のように、日本の上代において、素晴らしい制度や進んだ制度、

礼楽と言っていますけれども、刑罰・政治、いろいろな文明的な制度や組織、文化。それがあつてそうしてですね、日本人のいわゆる神道のような素朴な思想というものが無くなっておれば、天皇家も三代ぐらいで終わっていたに違いない、と。つまりこれは我が国の風化の致すところで、事実として在ると言う事は出来るけれども、これを誇つてご歴代聖徳の報い、道の至った報いである、盛んなるご歴代の御徳のお陰である、と言うと、これは大陸の（中国という古葉を使っていますかね、シナといわず）人に笑われるに違いない。いわゆる天壤無窮というのは希望条件としてあるのであつて、事実としてはありえないことだ。つまり天皇の地位がご歴代ずっと続いて、天地とともに窮まりなし、というのであれば、それは自然の法則に従わない国家であるから、だからそんなことはあり得ないんだと。そういう風なことを述べているんですね。当時の学界の主流は、林羅山以来、革命是認なのです。室鳩巢は木下順庵の門人。順庵は藤原惺窩の弟子の松永尺五の門人であつて、その学問の系統は林家と同じです。それに対して遊佐木斎は、そうではないんだということで、縷々議論をしています。つまり水戸の史学の立場は、崎門と立場を共通にします。その山崎闇斎の学統を受けた栗山潜鋒は水戸にいる。彰考館に入っているわけです。そしてそれがああいう立派な働きをしている。「国体」という言葉もおそらくは栗山潜鋒あたりが使い始めたんじゃないかということを名越會長先生は書いておられますが、そういうふうには、当時の学界というのは必ずしも水戸史学の立場とは同じではなかつたんです。しかし義公以来ずっと大井松隣から百年経つて藤田幽谷でしょう。これ同じ事が書いてありますよね、同じ精神。それを受けていわゆる後期水戸学というものが出てくるわけであつて、それが、非常な国家的な危機の中で力を持って明治維新へとつながっていくわけです。つまりこの精神が日本の国を救つたわけです。室鳩巢のように、歴代のご聖徳のお陰ですーつと続いてきたんだということは、それはおかしいという意見が今でもあるはずですよ。現在の学界だつて同じです。しかしそのご歴代のご聖徳というものによつて、我が国が誇りとまとまりを取り戻しては新たな道を進みだしたという事例はいくつもあるんです。非常な危機の事態を。明治維新もそうでありましょう。これは明治天皇のご聖徳と言うほかはない。もつと間近く考えてみれば、昭和天皇をお考え下さい。あの敗戦の後のマッカーサー元帥との会見、これが如何にマッカーサーをびっくりさせたか。おそらくあの一回の会見で日本に対する占領政策というものは、マッカーサーの中で大きく変化したと思います。それがどれだけ日本国民にとって有り難い幸せなことであつたか。しかもそのあと、全国をご巡幸された。いわば巡礼のような気持ちで、私は国民と共にある。みんな一緒にがんばろう、とい

うことで陛下はずーっと津々浦々を歩かれた。沖縄にはとうとう行く機会は失ってしまわれたわけですけども、沖縄にも行かれたかった。あれがどれだけ国民を励ましたか、国としてのまとまりを維持する力となったか、まことにはかりしれない。マッカーサーとの問答については当時中身は知られていないわけですが、これは一切の責任は自分にあるから自分を処罰してほしい、と言いに行かれたんで、マッカーサーはびっくりしたんですね。そのことはしかし国民は知らなかった。国民が実際に陛下の御心に触れたのは、あの全国行脚です。私もも小学校低学年でしたけれども、お出迎えに行きました。もしあれがなければどうなっていたんでしょうかね。戦後の復興というもの、ああいう急激な復興、国としてのまとまりというものは、はたして維持できたんでしょうか。そういうことは忘れられてしまうものですが、でも、忘れてはいけないことだと思います。つまり日本の国というものを考えるときに、いわゆる権力的な対立闘争、支配というような考え方でこれを見るのが果たして正しいのか。それはいわゆるヨーロッパのデモクラシーというものの基礎を流れる考え方ですが、それとは全く発想を異にする、『大日本史』の見た方を根本に据えて、日本の歴史のあり方というものをもっとより深く考え、理解する。そのことがやはりこの国をさらに栄えさせていく一番大事なもとなるんじゃないかと思えます。『大日本史敍』と『進大日本史表』というものを読みまして、水戸の歴史観というものを確認するとともに、これは決していわゆる定説、天下の公論ではなかったんだということを頭に置いてください。むしろ幕府を中心とする御用学者達は、これと反対なんです。水戸の地においてそういう研究が進められてきて、それは結局は明治維新につながっていく、そういう働きをした。ということを考えて頂きたいと思えます。時間がそろそろ来たようですので以上で終わりにします。どうも失礼しました。

### 【語釋】

トユクフツ  
都兪吁咈

ああと讀む。君臣の討論審議の意に用ひる。四字とも感歎の詞で都兪は賛成、吁咈は不賛成の意味。

カボキユウ  
嘉謨徽猷

嘉謨猷は同じ意味。良いはかりごと。

ボクン  
謨訓

國家の大計となる教へ

カンキ  
姦宄

在外曰姦、在內曰宄

并學 シヨウガク

并學院は平安時代に在原氏の子弟のために設置された大學別曹の一。中世以降その公卿別當の名譽的地位は源氏公卿の第一の者がることとなり、淳和院并學院別當として存續し、徳川將軍は淳和并學兩當の稱を稱した。

尸素 シソ

尸位素餐の略、祿盗人のこと。

牆面 シヨウメン

牆（かきね・へい）に面しているために前が見えない。學問がなく道理に暗いこと。

乃の心は王室に

書經に「身在外、乃心罔不在王室」乃心スと和譯する者多し。

蘭臺石室 ランドアイセキシツ

蘭臺は漢代帝室の文庫。石室は圖書をしまっておく部屋（史記・太史公序にある。）

闡幽微顯（幽を闡き顯を微にし）

左傳に「其微顯闡幽、裁成義類者、皆據舊例而發義」とある。

原始要終（始に原づき終を要とす）

「易之爲書、原始要終、故知死生之說」

三長 サンチョウ

史家の備ふ可き者。才智・學問・見識の三をいう。

剗剗 キケツ

彫刻用の曲つた刀。剗はきざむ、彫刻する。

屏營 ハイエイ

惶恐に同じ。

（平成十三年九月二日講座）

（茨城情報専門学校校長）